

## 社会的ニーズにこたえる 精神科医療の充実をめざして

### 新井 哲明 先生

筑波大学附属病院精神神経科教授

#### Profile

1990年筑波大学医学専門学群卒業，筑波大学附属病院医員。医療法人社団有朋会栗田病院，東京都立松沢病院精神科，東京都精神医学総合研究所を経て2010年より筑波大学大学院講師，2016年より現職。日本認知症学会理事・専門医・指導医など。



#### 認知症の病態解明をめざして

—まず，新井先生が精神科医を目指されたきっかけを教えてください。

私は茨城県のひたちなか市（旧・勝田市）で生まれ育ち，1984年に筑波大学医学部に進学しました。精神科医になる道を選んだ理由としては，幼少期の経験が多少なりとも影響していたと思います。

1つは，今なら認知症性の疾患を疑ったと思いますが，祖母が精神的にバランスを崩した時期があり，それが強く記憶に残ったことがあります。また，本を読むのが好きで，精神科医が書いた本もよく読むなかで「精神科医になれば自分もいつか本を書けるかも」と考えたこともきっかけとなったかもしれません。

医学部を卒業して研修医になったとき，筑波大学医

学部の精神神経科医局は研究分野として神経病理学，生理学，薬理学の大きく3つの領域がありました。私は，先輩の水上勝義先生から指南を受けたこともあり，次第に研究テーマとして神経病理学に関心を寄せるようになりました。

那珂市の栗田病院，東京都立松沢病院での臨床研修を経て，29歳のときに東京都精神医学総合研究所神経病理学部門で本格的に神経病理学の研究をスタートさせることとなりました。

—精神疾患領域のなかで，認知症の基礎研究に取り組まれたのはなぜでしょうか。

当時，神経病理学の主なターゲットは認知症でした。そのため研究内容としては主に，認知症の死後脳を顕微鏡でのぞいて病理学的に調べたり，蛋白質を抽出して生化学的に分析する作業を行っていました。病理学